日本水文科学会について語る 日本水文科学会を維持したければ、 論文“等”を学会誌に投稿するしかない

樋口 篤志^{1*}

**If you want to keep the Japanese Association of
Hydrological Sciences active, you should submit “a kind of paper” to
the Journal of Japanese Association of Hydrological Sciences**

Atsushi HIGUCHI^{*1}

I. はじめに

井岡編集委員長より本企画への寄稿を依頼されました。ここでは企画の趣旨から少しだけずれて「日本水文科学会」について多くは語らず、「日本水文科学会誌」について語りしたいと思います。日本水文科学会誌の直近の状況については、飯田(2020)が詳しく記載しています。かなり控えめに記述していますが、届く学会誌の薄さから危機的な状況が続いていることは編集委員でなくとも容易に想像はつくはずです。常任委員長の小寺氏はやや楽観的な見通しを示しています(小寺, 2020)が、私の見立ては飯田(2020)に近いです。以下、思うところをつらつらと書いていきます。あくまで個人の意見であることを付記しておきます。

II. 和文科学雑誌をめぐる状況

私自身は現在水文・水資源学会誌の編集出版委員長です(樋口, 2020)。和文科学雑誌をめぐる状況はどれも大差は無いと思われ、樋口(2020)では学会の投稿原稿数をそのコミュニティの(知の)基礎代謝であるというアナロジーをたて、基

礎代謝をあげるために掲載料無料化を提案しています(本提案は水文・水資源学会理事会で承認され、2021年度投稿分は無料化されます)。樋口(2020)に刺激を受けた松山(2021)のコメントに和文科学雑誌の活性化に向けたヒントが隠されているように見えます。松山(2021)はこの原因を大学の指導教員にあると説いています。要は卒業論文を学会誌に投稿するように仕向けられれば良い、ということです。多くの卒業論文は日本語で書かれており、それらを英語に直して国際誌に投稿するにはものすごいパワーが要るが、日本語での投稿論文作成であれば、最小の努力で最大の効果を得ることができる、と続けています。事実、日本水文科学会誌には卒業論文、大学院修士論文をベースにした論文が非常に多かった(私自身も最初の論文は卒論をベースにした樋口ほか(1998)でした)と思います。学術大会では、学生、大学院生の発表は今でも活発になされているように見受けられるため、指導教員あるいは編集委員等が直接、学生会員に投稿を促す活動を地道に続けることがまずは大事だと思います。

視点を変えます。我が国の置かれている状況を端的に表現すれば少子高齢化であり、これはどの

¹ 千葉大学 環境リモートセンシング研究センター Center for Environmental Remote Sensing (CEReS), Chiba University

* 責任著者 higu@faculty.chiba-u.jp

学会も逃れることはできないでしょう。新規会員の獲得、特に学生会員の獲得はどの学会でも苦勞しており、少ないパイを奪い合う現状にあると思います。さらに長く続いたデフレにより可処分所得が目減りし、(コロナ禍の影響が無くとも)学生の経済状況が悪化しているのは教員の肌感覚で痛いほど分かります。こうした状況下では、学会入会について、そのメリットを指導教員が事前に十二分に説明する必要性が生じます。一方学生側からの視点で(自腹を切った)学会入会という行為を見直すと、イマドキの学生の根底に流れる判断基準は「お得感」と「多様性」であり、その両方を満たすJpGUでの発表を望みがちです。そのこと自体は決して悪いことではなく、地球科学を網羅するJpGU大会は、専門性がまだ固まっていない学生にとって刺激的に見えるでしょう。一方、専門的な議論を深く行う際には、たとえ少数でも特化した専門家集団の中で採まれることが大切だと思います。これが少数規模の学会が学会として存在する意義だと思いますが、学会入会について、所属学生に時間をかけて説明している教員は何人いるでしょうか?少なくとも私はそこまでの時間を割けません。端的に言えば「価値観が変わった」で終わってしまいますが、持続可能なコミュニティの維持のためには、価値観の変化に対応した学会運営をしていく必要があるでしょう。会員から集めた会費の多くが学会誌の発行と学会事務運営に割かれることから、学会誌は(どの学会でも)良くも悪くもその矢面に立たされるのです。

Ⅲ. 学会を維持するために…は本末転倒

年齢的に学会運営に関わる仕事が増えてくるに従い、加入している学会(誌)の巻頭言やコラム等にもより目を通すようになってきました。本学会評議員でもある檜山氏による水文・水資源学会誌の巻頭言(檜山, 2021)では、「水文学」を世の中にもっと広めませんか?と啓蒙しつつ、(学者としての)自分自身のアイデンティティの発出を

怠るべきでない!と切実に訴えています。この中で本学会と水文・水資源学会の会員数について記述があり、前者は193名、後者は672名とあります。また、気象学会「天気」での理事長巻頭言では多様性の価値について、「研究者が狭い研究分野の世界に閉じていては、気象学全体としての多様性は発揮されません」と説いています(佐藤, 2021)。これらのことから想起されるのは、たとえ少数精鋭の研究者集団の学会とはいえども、持続的な運営には欠かせない多様性の保持のためには最低限の会員数を確保する必要がある、(私自身の肌感覚では)それは300人ではないか?と思えます。少数精鋭の学会での研究会は手の内が知れた中での真剣勝負!と言った意味合いや、「同じ釜の飯を食べた」仲間の同窓会といった側面もあり、そのこと自体は否定すべきものではないと思います。一方で、前述の基礎代謝のアナロジーで考えると、200人を切った会員数、さらに若手会員の新規参加数の減少を考慮すると、年3号の運用はもはや困難と見るのが自然です。

学会誌発行回数を年2回に削り、たとえば、1号に大会予稿集を、2号に大会で実施した特集の寄稿文で構成する(投稿があれば無論掲載します)、という対症療法的な運用も思いつきますが、本質的な問題として、「学会としてそれで良いのか?」がついて回ります。こうして考えてゆくと、最終的にたどり着くのは学会誌の発行を止める、という選択です。この選択をすると学会は研究集会を実施するために存在し…となりますが、そろそろ根源的に「何のために学会を維持するのか?」について、タブー無しで議論をする時期に来ているのではないかと思います。前述の檜山(2021)では「学会を盛り上げることを通じて水文学が盛り上がってもよい(したがって学会を盛り上げることが目的でもよい)」と考えます」と述べていますが、本末転倒になってはいけないと思います。あくまで盛り上げるのはその学術分野であって、学会はそのための手段(の一つ)だと思います。

この問題の類似性を私は日本の地方銀行や中小

日本水文科学会について語る日本水文科学会を維持したければ、論文“等”を学会誌に投稿するしかない

企業の多さに見ることが時々あります。「小さい故に隔々まで行き届いたサービスが…」等、その存在意義を見出すことは容易でしょう。一方で、その機能を維持するためには適正な規模があることを忘れてはならないと思います。規模が小さくなるほど企業数は多くなり、機能維持のために必要な類似性の高い作業をする人が全体として増えることで業界の効率が悪くなり、競争力を失う、という悪循環に陥りがちです。加えて、研究業界はお互いの専門性を破壊しかねない研究成果の数値化がより進み、研究組織の定員減の中で分野の淘汰が促進される可能性が危惧されます。こうした状況下で熾烈な戦いを経てパーマネントの職を得た若手～中堅は、昔ほどいわゆる「雑用」はしません。これは当然の帰結だと思います。学会仕事を頑張っても職を得ることに直結しないからです。本学会30周年記念特集で実施した「周辺学術分野および技術発展と水文科学」(小野寺, 2019)の原稿の多くが未だに揃わないのもこの文脈上に要因があるのではないかと私は思います。

Ⅳ. おわりに

日本水文科学会誌を冷静にみると、他の和文誌を比べて投稿を律速させる要因が少ない(というか、無い)ことに気がつきます。まず掲載料が無料です(他の雑誌の多くは有料です)。論文として受理されれば、査読付き論文としてJ-Stageに掲載され、誰でも読むことができます。つまりアクセス性は抜群です。国際誌にバリバリ論文を書く人も、時々日本語で総説や論文を書くことで、自分自身の専門性を国内で宣伝することができます。さらに論文や研究ノートでなくとも資料という形で貴重な観測データを記録として残すことも可能です。近藤(2021)は「論文には観測事実とは別に著者の考え、つまり思想が書かれてあり、思想・宗教の自由は許されている」と述べています。本学会が得意とする、地域の地下水環境の記述的論文もまずは貴重な観測データからスタートしており、しかも事例の積み上げが重要で

あると会員の多くが考えていると信じたいです。そのため、特にシニアな会員の皆様に、論文にするのは難しくボツにしまった観測データについても、是非資料として投稿して頂きたいと切に思います。「同じ釜の飯を食べた」仲間の同窓会を残したいと願われるのであればなおさらです。学会誌は会員の意思を示す(学会を残したいなら、残したいなりの意思を、その役割を終えて閉じる際には、それにふさわしい終わらせ方をする)鏡であると思います。ここまで書いても自発的投稿が増加しないようであれば、いよいよ店のたたみどきではないでしょうか。

文 献

- 飯田真一(2020)日本水文科学会を編集委員会から眺める. 日本水文科学会誌, **50**(3), 124–126.
- 小野寺真一(2019)日本水文科学会設立30周年記念 特集「周辺学術分野および技術発展と水文科学」序文. 日本水文科学会誌, **49**(2), 71–72.
- 小寺浩二(2020)これからの水文科学会: 連携・連合と独立. 日本水文科学会誌, **50**(1), 1–2.
- 近藤純正(2021)観測の誤差から真実を見る—地球温暖化観測所の設立に向けて—. 天気, **68**(1), 37–44.
- 佐藤 薫(2021)多様性の価値. 天気, **68**(1), 3.
- 松山 洋(2021)「第17期 編集出版委員長の就任にあたって」を拝読して. 水文・水資源学会誌, **34**(1), 69–70.
- 樋口篤志・嶋田 純・田中 正(1998)阿蘇西麓台地南部・高遊原台地周辺における地下水流動系について. 日本水文科学会誌, **28**(1), 13–22.
- 樋口篤志(2020)第17期 編集出版委員長の就任にあたって. 水文・水資源学会誌, **33**(6), 308.
- 楡山哲哉(2021)「水文学」を世の中にもっと広めませんか? 水文・水資源学会誌, **34**(2), 97–99.